

第3次生涯学習推進計画の実施状況に関する調査結果 その2

■調査目的

第3次丸亀市生涯学習推進計画のもと、市民と行政が一体となって生涯学習を通じた「ひとづくり」「まちづくり」を推進するために市民の生涯学習活動を支援し、様々な施策等に取り組んできた中で、以下の点について各委員から評価や意見をいただき、第4次生涯学習推進計画の策定に向けた参考資料とする。

■調査対象

- ・第3次・第4次生涯学習推進計画策定にかかる社会教育委員
- ・第3次・第4次生涯学習推進計画策定にかかる特別出席者

■調査内容

1 学びのための環境づくり

- ・生涯学習に関する啓発及び情報提供と学習施設の有効活用
- ・ライフステージ、現代的課題に対応した学習機会の充実
- ・スポーツと文化芸術活動を通じた生涯学習の充実

2 学びでつながり、学びを活かすまちづくりの推進

- ・学びを通じた人や地域等のネットワークづくり
- ・学んだ成果や経験を生かしたまちづくり

3 家庭・地域・学校における連携の推進

- ・家庭・地域・学校の連携による地域教育力の充実
- ・学校や子どもを核としたまちづくりの推進

■調査方法

アンケート用紙を配布し、持参またはFAX・メールで回答

■調査期間

- ・令和3年7月9日～8月6日

■回収状況

- ・第3次・第4次生涯学習推進計画策定にかかる社会教育委員20人
- ・第3次・第4次生涯学習推進計画策定にかかる特別出席者10人

1 学びのための環境づくり

生涯学習に関する啓発及び情報提供と学習施設の有効活用や、ライフステージ、現代的課題に対応した学習機会の充実について、成果（現状）や課題をご記入ください。

今後の取組方として、お考えがあれば具体的にご記入ください。

- ・コロナの影響で生涯学習施設の利用者や講座数が減っているため、オンラインを活用した講座を行う必要があるが、高齢者の方にはPCやタブレットの扱いが難しいため、まずはPC等の扱い方の講座を行う必要がある。
- ・丸亀中央生涯学習まつりは、登録団体の活動発表の場であるが、市内各地で文化活動をしている人たちの統一した発表の場が設定できないか。
- ・県公民館等研究大会にコミュニティセンターからの出席が非常に少ない。生涯学習推進の立場からすれば、他地区の活動も参考になることが多い。
- ・生涯学習クラブ登録制度一部見直し、緩和へ。
会員の高齢化、リーダー不足、登録要件の10人確保が難しい、新規会員が加入しづらいこと等。
- ・コロナ禍の影響もあると思うが、文化施設の利用者減、また生涯学習クラブ登録数が減少している。生活文化の多様化、リモート学習等原因はたくさんあると思うが、的確な分析が必要でないだろうか。
- ・「学びのための環境づくり」という基本目標達成のため色々な施策が幅広く実施されている。これは良いことだが、一方効果が薄まるという悪い面もある。今後は、戦略的、重点的に注力する様な取組を実施した方が良い。
- ・どこにいても学べる環境の整備（Zoom等の利用）。
- ・誰でも学べる機会の提供。
- ・学べる内容の充実。
- ・地域コミュニティにより各団体との連携がうまくとれていない地区があるので、協力出来る方向性にもっていく。
- ・どの年代がターゲットなのか、どのようなことができるかを明確にし、ポイントを絞ったPRをすれば情報が浸透しやすいのではないか。
- ・学習機会はあっても友人がいなくては参加しにくい、身体的に移動が困難、交通手段がないなど、参加できていない人へ、ICTを活用した機会をつくり、参加方法は訪問して教えたり、自治会をまわったりして、ICTが苦手な人にも使えるようにしていく仕組みが必要。
- ・生涯学習推進計画があることによって、それぞれのコミュニティセンターや社会教育施設等で地域性を活かした工夫された事業ができています。
- ・ライフステージに応じた事業が工夫されている。若い層の参加は難しいことともありますが、今後も工夫してください。
- ・生涯学習を行う人材の確保が出来ず、実施している方が高齢化している。
- ・イベント、生涯学習参加者が固定化している。
- ・若い方、中年層（主婦等）に参加を促すには、日時や開催時間の工夫が必要。

- ・コミュニティの活用やイベント参加のPRをどのようにするか、コミュニティ便り、ホームページの充実等が必要であり、これらを見てもらう為の便りの内容や活動内容の見直しが重要。
- ・文化芸術活動に関しては、施設利用者、参加者数とも年々と減少している。課題の追求・対応が必要。市民会館がなくなったことも影響しているのではないか。丸亀市にとって市民会館は文化芸術を推進していく中で必要。
- ・社会教育施設の利用も減少している。どのような学びが必要か、またニーズがあるのかを検討必要。
市民の意識がどんどん離れていっているように思われる。
- ・施設利用のルールの見直しや利用促進の周知、活動の周知、活動の有効性も検討。もっと誰もが自由に学びの場を創ることができ、自由に参加できるようなシステム作り。
- ・広報は紙面のみならず電子媒体を積極的に活用していくことが望まれる。メディアをミックスさせて複層的に行うことで有効性が高まる。
- ・インターネットやSNSでの利用促進のための技術的な研修や機材の導入をサポートする（各自でそろえさせるとICT技術の差が如実にあらわれ非効率であるため）。
- ・センターでの催しを抱き合わせで開催するなどして参加人数をトータルで増やす。（コロナ禍では難）
- ・指導者を探すことはとても大変なこと。日常的に（何年もかかり）指導者を模索している。1つのクラブを登録するまでに1年以上かかる。人口が多い校区でも会員はなかなか集まらない。
- ・環境づくりに関して、想定外のコロナ禍で各地でオンライン講座が試みられたが、一方で実施していない、今後も予定なしというところもある。確かに、地域の実情によっては不要のところもあるが、とはいえコロナ云々にかかわらず、Society 5.0という方向性もあり、実際にオンライン講座を実施するか否かにかかわらず、職員としてはオンライン講座の実施ができる能力を身に付ける必要はあるかと思う。
- ・社会教育施設向けの調査結果の中にあつた、「オンライン講座等をどのような方法で実施するかアドバイスしてください」という意見にも耳を傾ける必要があると思う。
- ・マルタスの位置づけも次期計画には入れる必要がある。
- ・生涯学習講座等の事業を積極的に実施したが、若者や働き盛りの方に向けた事業については十分な成果を上げることはできていない。今後は配信等も活用して、更に多くの方に向けた事業を行う必要がある。
- ・子どもたちの中には身体や精神に障害を持つ子、個性（特性）が強く、集団生活が苦手な子どもがいる。就学前施設や学校では、その子に応じた配慮がされ、できる限り健常児と同じ活動や体験ができるように環境づくりも進んでいますが、家庭生活においては気兼ねなく連れて行けるところが少なく困っている保護者は少なくない。
そこで、障害のある子どもが安心して遊べる「インクルーシブ公園」を造ることを提案したい。親も一緒に滑ることが出来る幅広の滑り台や車いすに乗ったまま遊べる砂場など障害のあるなしに関わらず一緒に遊べ、交流の場としての役割も大きい。

※ “人生に必要な知恵は、全て幼稚園の砂場で学んだ” ロバート フルガム氏

- ・生涯にわたり常に学び続けたいと思っている人は少なくない。その場があったり、チャンスがあったりすれば、また、それを続けてみたいと思う内容であったりすれば、多くの人はきっと興味を惹かれるだろう。
- ・各コミュニティセンター等でも、活動するクラブは様々で数も多いと思われる。長年その活動に関わっている人も多くいるだろう。しかし、その弊害もあるのではないか。人間関係が出来上がっているサークルには、敷居が高いと感じる人も多いただろう。何年かに1度は、クラブ活動を大幅に、または一部、刷新していく取組が必要ではないだろうか。
- ・坂出の大橋図書館は、住宅の入り組んだところにある図書館だが、また利用したいと思える図書館である。子ども向けの蔵書が多く、調べ学習に対応し、各小学校との連携も取れている。駐車場も近く、市外の者であっても100冊も借りることができる。親切な対応、見やすい工夫がある。

現在の丸亀市立図書館は、大人向けが主であって、子ども向けの蔵書が少ないと感じる。子ども向け図書館ができないものか。特に小学校では、「紙をめくり調べ、鉛筆でメモをする」ことが脳の発達にも良いとされている。タブレットを個人に渡す国の施策とは逆行するが、そこに丸亀の独自性をもっと出してよいと思う。大橋図書館に学ぶことは大きいと思う。

各コミュニティセンターの蔵書も定期的に点検し、市立図書館まで行かなくてもコミュニティセンターに行けば借りることができるようにできないか。新刊等はほぼ入ってこない今の状況は、ただの書庫のような状態となっていないだろうか。

- ・施設の充実という面においては、丸亀市は恵まれている。
- ・生涯学習事業に関する職員のスキルアップにも丸亀市は積極的に取り組んでいる。
- ・その時代、時期のニーズにあった取組、養成が必要。それぞれの範囲の中で、新しい講師の紹介やテーマの選択も大切で、時々そんな話し合いも必要。
- ・生涯学習センターの取組を知らない人も多いので、紹介や口コミも大事。

キーワード

- ・オンライン等ICTの活用
- ・参加者の高齢化、固定化
- ・若い世代の参画の必要性、方法
- ・生涯学習に対するニーズの把握、把握したうえでの施策、工夫が必要

2 学びでつながり、学びを活かすまちづくりの推進

学びを通じた人や地域等のネットワークづくりや、学んだ成果や経験を活かしたまちづくりについて、成果（現状）や課題をご記入ください。

また、学習成果や人材を地域に結び付けていくために、何が必要と思いますか。

- ・健康づくり推進で、年3回以上健康講座を実施（音楽療法2回・食の文化・健康体操・歯の健康等）。
- ・学校支援ボランティア、高齢化社会を支える有償ボランティアを募集しているが、今一つ浸透していないのか反応が良くない（婦人会、老人会へ協力依頼を重ねたい。PTA保護者の反応が鈍い）。
- ・コミュニティだよりによるサークル活動紹介、新規活動へのお誘い。
- ・女性活躍社会づくり、女性をリーダーとした社会参加による健康推進イベントの開催。地域内、事務所を含めて2年に一度健康まつり。
- ・概ね、それぞれの施策の効果が出ていると思う。特に、「学びを通じた人や地域等のネットワークづくり」は進化しているように思う。今後もこの方向性をもって目標達成のための施策を決め実施していけばよいと思う。
- ・どのような活動に活かすことができるのか分からない。
- ・身近で活かせる活動を見つけれない。
- ・学びの成果を様々な場面で活かすことができる機会の提供。
- ・学びの成果を他の地域の人に活かすことができる仕組み。
- ・色々な講習を学習した人材を活かしてほしい。
- ・学んだ成果（趣味の講座や活動）は、発表の場としてまつりのステージ等だけでなく、青い鳥教室へ月替わりで子どもに教える、講座で集まって老人ホームへ訪問し見てもらう場が必要。
- ・新型コロナウイルスの影響でネットワークづくりも難しい中、地域のコミュニティセンターを中心に様々な行事が行われていることは大変良いこと。
- ・学校にとっては、地域の人材の支援はこのようなコロナ禍だからこそ必要。
- ・学びを地域活動に活かす、具体的にどのように関わっていくか、学び者が分かりにくい。
- ・コミュニティなどで地域活動に関われる機会や場面を作る必要がある。
- ・何をどのようにすればいいのか、これまでしたことがない方は分からないと思う。
- ・コミュニティが主な対象になっているので、市民活動団体等、活動する団体や活動の紹介を積極的に行い、丸亀市内の資源全体像を把握して、繋がりができるきっかけを創っていく。
- ・人材バンク（学習をした人は登録を進める）も可視化しマッチングするコーディネーターを配置するシステムを構築する。
- ・個人や団体もつスキルを積極的にアピールできる場、周知するもの、など構築する。「私、〇〇〇（こんなこと）できます！」
- ・ボランティア登録や職員採用など正規の取組（金銭的・精神的報酬の有無あるいは主体化）として積極的に位置づけるしくみを取り入れる。
- ・活動の場を広げるために、社協や多様な地域活動団体などとの連携を行う。
- ・若い世代の活動の場づくり（ユースワークなど京都市参照）。

- ・ 何度も、人材難、高齢化、参加者の固定化、若い人をいかに取り込むかという課題が出てきたが、これは5年前も同様で一朝一夕に解決できるものではないが、何もしないわけにはいかない。新しくマルタスがオープンし、新しい考え方を導入して若い人をひきつける事業を展開してほしい。
 - ・ SDGsについても積極的に計画に位置づけてほしい。
 - ・ 各講座内や講座間の受講生や指導者において一定のつながりを持つことはできている。その方々の発表する場において、友人らを招くことにより、地域のつながりづくりにもなっている。
 - ・ 自分が身につけたものを提供することで、喜んでくれる人がいることはやりがいを感じるし、生きがいになってくるかもしれない。また、手助けされた人も今度は自分が手助けできる人になろうと思うかもしれない。そんな幸せ連鎖を生むシステムを構築してほしいと思う。
- 例えば、城北コミュニティが実施している「ポイント制」は意識を高める方法として魅力があると思う。ポイントに応じて物品というよりは、そのポイントで自分が困ったときに支援が受けられる「持ちつ持たれつ」の昔ながらの風習を現代社会に合わせて目に見える形にするとモチベーションが上がるのではないか。
- ・ 現在は、人と直接関わらなくても生活することができるようになってきている。だからこそ、「人と直接かかわり、それを楽しく思える活動」が重要になってくる。一人でいるときよりも誰かといるときは、人は数倍笑うとさえ言われている。
- 調査結果を見ると、「コミュニティ活動に無関心な人への情報が届きにくい」とある。無関心な人でも、何かのイベントに参加したりそれを見かけたりすることはあるだろう。大小のイベントを組込ながら、単発で終わるのではなく、小さな点をつなぎながら、少しずつ根気よく広げていくことが大事だと思う。市全体の取組だけでなく、各コミュニティでどんな活動を、どう活動するのか、どう盛り上げるのか、どのように続けるのか、誰がそれを推進していくのか、その道筋が見えるとよいのではないか。
- ・ コミュニティセンターに丸投げするのではなく、初めだけでも、行政からもそこに参加し、リーダーを育成する、人材を確保するなどの手助けをするのはどうだろう。道筋が見えることが参加意欲や将来に対する希望となるのではないかと思う。
 - ・ 生涯学習を受講した人たちの小グループもいろいろなところで生まれており、それぞれ個人の特技が次々と伝達することでまちづくりにつながっている。
 - ・ 人とのコミュニケーションと、育てていく人材が必要。
 - ・ 高齢者の方たちにいきがいとグループ作りが必要。

キーワード

- ・ 学びの成果の還元
- ・ 他分野との連携
- ・ 人材の把握、発掘
- ・ 新しい施設の有効活用(マルタス、市民会館)

3 家庭・地域・学校における連携の推進について

家庭・地域・学校の連携による地域教育力の充実や、学校や子どもを核としたまちづくりの推進について、成果（現状）や課題をご記入ください。

- ・コミュニティだよりで学校支援、エールのページ設定。コロナ禍の中で、生徒会活動や部活動紹介、発表や活動紹介は学校支援として喜ばれている。
- ・地域コーディネーターの全コミュニティへの配置、コミュニティ・スクールの発足、「地域と共にある学校づくり」良いスタートができた。しかし、学校が必要とする支援を、地域で上手く支援確保できるか、高齢化と適切な人材確保の難しさに直面している。
- ・保育所立ち寄り後、移動図書館車の巡回を頂き有難い（月1回水曜日）。
- ・まち歩き、町探検の実施による郷土学習（総合学習の時間確保は難しいと思われるので、土、日曜日に実施）。
- ・都市公園整備後、公園内花壇の管理維持を地域住民に開放したい。
- ・夏休み、学習支援活動時の昼食を法の郷食堂班が希望者に食事提供。
- ・基本目標の達成が一番難しいと思うが、大事な課題でもあるので、目標達成のためには大きな施策の転換が必要ではないか。例えば、家庭・地域・学校、それぞれの組織団体をつなぐための協議会の設置など。
- ・コミュニティ区域と小学校区が一致していないため、家庭・地域・学校との連携は難しいと思われる。
- ・各コミュニティにて広報を発行しているが、「土器さんさん」は7月号、8月号で連携を取り上げている。自治会に入会していない方もHPにて見ることが出来、地域の行事等が分かりやすい。
- ・昔の区域の見直し。
- ・各コミュニティ発行広報と市推進計画との連携。
- ・やはり小学校区での動きが一番良いのでは。
- ・多忙な人々が、日々の生活を越えたところで地域等に目を向けるのは難しいのではないかと。ボランティア等の力の活用は大切だが、何かをしようとするなら予算立ても必要。
- ・栗熊地区では、地域学校協働本部（栗っこ応援隊）で令和3年度より、サマースクールとして、バナナハウス見学、重機体験、読書感想文教室、英語教育、宿題教室を8月上旬に開催し好評だった。地域の農家や工務店と子どもたちがふれあう機会ができてとても良かったし、子どもたちも家でだらだらするより時間を決めてメリハリをつけて勉強できて保護者にも喜んでもらった。
- ・地域ごとに特色があるのだから、それぞれの特色を生かしたまちづくりができるようなアドバイザーがいれば、各コミュニティも活動しやすいのではないかと。
- ・コミュニティで活動する人と、PTA、学校関係者との繋がりが一部の人は連携しているが、幅広くは関係性が作れていないように感じる。これは人材や関わり方の固定化にあると思われる。その解決策はなかなか見いだせないが様々な試みをしていく中で、みつけれられるかもしれない。

- ・コミュニティ組織と学校、家庭は連携しやすいが市民活動団体はなかなか受け入れてもらえない。地域性か。市内の資源として地縁組織と共に受け入れや連携することも大事。
- ・コミュニティ・スクールメンバー等への介入も検討してほしい。なんのために連携するのか目的があいまいになっていないか。地域全体で子どもを育てる気運を高めることだと受け止めているが、学校のお手伝いの請負のような立ち位置になっていないか。
- ・切れ目のない育ちの場づくりを目指して、福祉行政との連携を取る。
- ・就学前や卒後の地域・家庭での学びをサポートしていくための策を考える。
- ・当事者に課題を聞く、調べる（座談会や聞き取り調査のような場を研修や養成塾のプログラムに入れるのもいい）。
- ・必ずしも学区一地区という対応関係で活動していない幼保や特別支援あるいは中学において、取組を強化していく必要がある。
- ・10年以上も前から続いていた老人会との交流（さつま芋、玉葱の植えつけ、収穫）が、ここ3～5年前から全くなかった。
- ・市内幼稚園、こども園、小中学校のコミュニティ・スクール化については、形だけ整えるのではなく、より一層地域連携が進むことを期待している。
- ・令和3年度よりコミュニティ・スクールが導入された。複雑な社会状況の中、子育てが難しくなっている現状を踏まえ、家庭・地域・学校の連携、協働は不可欠である。
その連携調整する重要な役割を果たすのが“地域コーディネーター”だが、本市はH29年度より「地域コーディネーター養成塾」を開校し、その育成に努めている。既に取り組んでいる先進コミュニティと情報交換・情報共有など、地域差を少なくする研修を計画的に実施し、学校とともに地域の子どもたちの健全育成に力を発揮することを期待している。この時に気を付けたいことは、配慮を要する子どもたちのプライバシーや活動で知りえた情報を口外しないことと、教師の狙いを外した子どもへの言葉かけや援助をしないこと。ボランティアの方にも事前研修は必要であるし、それを注意（指導）できる地域コーディネーターとボランティアの方との信頼関係は不可欠である。
- ・学校は、昔から今でも地域の中心となるところであると思うし、あらねばならないと考えている。また、「子どもは、学校で学び地域で育つ」この理念をもって全てのことにあたることが大切であると思う。
- ・地域と学校の協働体制については、それぞれの実態によって様々。
城南小学校区は学校を支援していこうという土壌があった。この土壌は一朝一夕にできたものではなく、学校と地域とが長い時間寄り添って築きあげられたものだと思う。
しかし、これも教職員の異動等により学校と地域の間の一線ができてしまう可能性をはらんでいる。現在は、コミュニティの支援を受け、協働本部は軌道に乗りつつある。少しずつではあるが人材も、また活動も広がっている。
- ・市内の学校がコミュニティ・スクールとなった今年、各学校で学校運営協議会という枠組みはできた。そこで、本当に「真ん中に子どもを置いた協議」ができる必要がある。各学校の協議は、子どものためを思った協議であったのかチェックする必要がある。その会で本当に協議

すべきことは何だろう。中身のある協議であってほしい。

- ・ 2回ほど参加させていただいた小中・地域連携教育連携協議会は必要な会議であったか。本当に必要な会議を、そして第一に子どものことを思う、そんな内容を協議していく構えが大切であると思う。前例踏襲は厳禁。中学校は中学校としての社会とのかかわり方や地域との関わり方を学ばなければならない。中学校は高校受験に向かうだけの学校ではない。柔軟な思考の持ち主である子どもたちを学校・家庭という少人数で支えるのではなく、地域の大人もそれに関わる仕組みづくりが必要である。人との関わりがなくても生きていける便利な世の中になってきた今だからこそ、あえてアナログに関わりを持つことが人間力を向上させることにつながると思う。
- ・ タブレットよりも温かみのある人間に関わるのが、幸せな人生を生き抜ける子どもたちを育てるのではないか。
- ・ 学校は、個人情報流出を恐れ（仕方がないことではあるが）実態を地域に漏らさないようにと構えている。支援する側の節度、学校の信頼、そこをどう構築していくかが課題である。
- ・ 地域学校協働本部は、各コミュニティと一体となり運営していく必要がある。人材発掘は容易ではない。一人一人への声掛けをして輪を広げ、和を広げていくこと、それに尽きると思う。コーディネーターとしての責務は大きい。そんなコーディネーターを個人のやる気にプラスして「コーディネーターとはどうあるべき」か、「責任と役割」を明確にしていくことが必要だろうと思う。
- ・ 高齢者と子供たちの事業を増やしていく。子どもたちも高齢者と触れ合うことで優しさやいたわりの気持ちが育ち、温かいまちづくりにつながる。
- ・ 今の子どもたちは塾や習い事、スポーツなどで忙しく、いろいろな教室に参加する人は決まっており、どうすれば、たくさん子どもたちに参加してもらえるかが大きな課題。

キーワード

- ・ コミュニティ・スクールと地域学校協働活動との一体的推進
- ・ 高齢化と適切な人材確保の難しさ
- ・ 各組織間の連携
- ・ 子ども、保護者の参画方法

4 次期生涯学習計画について

第3次生涯学習計画の策定から、この5年間の現状等を踏まえ、お気づきの点や次期計画に期待することがあればご記入ください（自由記述）。

- ・コミュニティ大賞の継続、コミュニティ活動冊子を発行してマルタス地域活動コーナーで活動紹介・まちづくり推進計画共々に。
- ・まちづくり補助制度の拡充、規模に応じた配分を。
- ・都市公園の整備が出来れば、公園内に展示コーナーを設置して子どもたちの作品巡回・作品展示をしたい。
- ・専任の生涯学習推進員を配置してほしい。
3期計画で予算措置をいただき感謝している。コミュニティセンターへの事務量増大による負荷。生涯学習参加年齢層の高齢化による学習参加者の確保困難。学校のように体系的に繋げる役割を果たす人の確保等、生涯学習そのものが人の生活から離れようとしている。今こそ生涯学習推進に必要なのは主体的に取り組める専任者の配置である。県内他市は、副所長が生涯学習計画の担当者として位置づけられ、地域づくりに取り組んでいる。
- ・飯中生、飯山校生の調理実習を兼ねて毎年秋に行っている高齢者食堂（法の郷食堂班）開催時に、調理実習と出来上がった食事の共食の機会を設けたい。
- ・センター内にいつでも、だれでも、予約なしに立ち寄れるふれあい交流室を設置頂いた。参加された人に喜んで頂けるようなイベントの工夫が課題。
- ・まちライブラリー事業で図書館まつりについて良い工夫はないか。
- ・市中心部に丸亀市中央児童センターの新設をお願いしたい（児童センター方式は、東小川児童センターのみで、児童の健全育成に向けてイベント企画、自由来館等児童の成長に合わせた社会性を育てる活動に孤軍奮闘頑張っている）。
- ・市民講座に、文化、スポーツ、政治・経済等著名人を招いて夏期講座を新設してほしい（生涯学習への無関心層、底辺の拡大につながる）。
- ・ホームページで第4次生涯学習推進計画について、施策の体系等紹介し推進に努める。
- ・戦略的、重点的に施策を決定、実施する必要性がある。
- ・学習もネットから得ることが一番簡単で手軽だが、やはり世代を超えての地域交流が一番の「まちづくり」だと思う。
- ・各コミュニティのHPも以前に比べると充実してきたが、HPもコミュニティ発行の広報誌もバラつきがあるように思う。
- ・自治会未加入世帯が増加している中、身近な情報提供が必要と感じる。
- ・市HP、市広報誌、中讃TVなどで市民が自分で情報を得ることが出来る仕組みづくり
- ・新市民会館が生涯学習と児童館機能を併せ持つ予定と聞いたが、県の情報通信交流館（e-とびあかがわ）の講座を、西讃を拠点として一部でも実施できないか（ワークショップ、体験、IT講座など）。
- ・コロナに影響されてできないと足踏みするのではなく、これならできる、ICTを使えばこれが

できる、集まらずに分散して行う方法はないか等、手数を減らさずに柔軟に対応できるような工夫や仕組みが必要ではないか。

- ・第3次生涯学習推進計画を継続する方向でよいのではないかと思う。
- ・各目標の共通課題である、人材不足、関わりを持つ方の固定化、また学ぶ方の高齢化等がみられる。

若い方ばかりではなく、いかに幅広い年齢層の方に活動参加や生涯学習の学びの機会をたくさん作れるか、斬新な企画をいかに作れるか、地道な活動や試みを続けていくしかない。

- ・多くの市民が生涯学習を行い、それを地域活動に繋げるかは生涯学習計画に課せられた大きな課題であると思う。
 - ・生涯学習が一部高齢者のもののように感じている感じがして、だんだんとすたれているような気がする。
 - ・施設利用数、クラブ登録数、講座参加数、全てにおいて毎年数値が下がってきているのは意識の低下だろうか。若い世代に向けての啓発、周知等意識向上にむけた取組が必要。
 - ・担い手となる人材育成が急務。若い世代が関われる時間、内容、場の提供等の検討。
 - ・市民活動としては、子育てする親世代に常に学びの場を提供し、担い手の発掘にも力を入れている。
 - ・従来の取り組みを活かす生涯学習環境の整備に加えて、アプローチが難しい層の明確化と対応をしていく段階ではないか？新規層への働きかけは、見直しの時期だからこそ取り組んでいきたいところだと思う。
 - ・コミュニティセンターのみならず、その連携可能性のある幼保、特別支援など社会福祉領域との繋がりを持たせて幅を広げることできる。
 - ・校区内に住みながら、コミュニティセンターにも遠くて行けない、自治会にも加入していない、クラブ活動にも加入していない、このような方々に情報が届きにくい。
 - ・地元の人たちと転入者との融合に時間がかかり難しい。
 - ・中高年層と若年層との交流、融合するには、活動時間が異なりなかなか出来ない。
 - ・社会教育施設向けの調査結果の中で、「全てボランティアでやろうとするのには無理がある」というのはそのとおり。財政難とは思いますが、予算措置を講ずべきところにはしっかり予算をつけてほしい。
 - ・社会のために何かしたいと願う人は少なくない。「これならできる」という力を持つ人を育てるために生涯学習があることを広め、魅力的な講座や興味関心が高い講座を企画して、参加者を増やすことを目指してほしい。
- 「志縁（時に人を助け）」と「支援（時に助けられる）」で住みよい丸亀を！
- ・生涯学習に取組たいと思っても、若年層の方は仕事や子育て等があり現実的に難しい。
 - ・一歩踏み出すためには、講座を土曜、日曜に開催し、託児の環境を整えるなどの配慮が必要。そこで地域の人と繋がれば、行事に参加したり、将来的には地域の力となる人材になる可能性が高くなると思う。人材育成には、地道な活動の積み重ねしかない。
 - ・コミュニティと学校区が異なるところがあるので、コミュニティ・スクールを推し進めていく

のであれば、やはり統一されることがベストではないか。災害時の避難場所にも関係するので変更する困難さは大きいですが、今がその時だと思う。ご検討お願いします。

- ・コミュニティセンターが地域の事務局となり、活動が広がっていくのが理想だとは思いますが、2人の職員で地域全般を回すには無理がある。住民の数にもよるが、職員の数を増やす、(非正規職員もいれて)有償ボランティア制度を構築する等、市を挙げてコミュニティセンターを改革支援していく制度が必要ではないか。
- ・家庭教育がマスコミに踊らされている感がある。日本の未来を、丸亀の未来を担う子供たちや、その親世代に必要なことを施策として打ち出していくことが必要であると思う。生活資金だけでなくメンタルを支える仕組みがあればと思う。

キーワード

- ・戦略的、重点的な施策の実施
- ・柔軟に対応できる工夫や仕組みづくり
- ・生涯学習の高齢化
- ・若い世代の担い手の育成
- ・幅広い世代の交流